

【ほしとりぼうさん】

これはぼくがまだ小学校へはいる前の話です。

夜、満点の星。

あれのいくつかでいいから、どうしても欲しくなって、箒（ほうき）でもって、打ち落とそうとしたことがありました。

その様子を見ていた気味のわるいおやじが、

「おい、坊主、阿呆か」

と、箒を頭上で振りながら、庭を走りまわっているぼくを嘲笑（あざわら）いました。

「おまえはだれじゃ」

「余は【ほしとりぼうさん】という、偉一い坊さんじゃ」

本当に偉い僧侶が、自分で「偉一い坊さん」というものだろうか。

すこしかんがえたが、かんがえる性格でもなかったので、

「えらいぼうさんなら、てだすけしてくれや」

というと、

「手助けするために、余がきたのであるぞ。坊主に星を取らせて、【ほしとりぼうさん】にしてあげようぞ」

「たのもしいのう、りっぱじゃのう」

誉めると、【ほしとりぼうさん】は偉そうな声で、

「こんな庭で頑張っている、星が取れるわけがなかろう。星は高いところにあるから、届くわけもなかろう」

「だば、どうすりゃええんかのう」

「頭を使え、坊主」

「あたまはつかえんが、からだつかつとる」

「へらず口の坊主め。ならば、身体を使って、屋根にのぼれ。庭なんかで箒を右往左往させても、星には届くまいて。さあ、はよう、屋根にのぼれ」

なるほど、さすがは偉一い坊さんだ。

ぼくが屋根にのぼると、すぐに足をすべらせて、地上にどんと落ちました。

落ちた拍子に、眼から星がいっぱい飛び出しました。

「ほしじゃ、ほしじゃ」

と、気絶したままぼくは、何度も讒言（うわごと）をいいました。

ずいぶん後になって、懐爺にきくと、

「【ほしとりぼうさん】は、おばけのなかで最も偉大な、おそろしい僧侶なのですよ」

どうおそろしいかは、いつくれなかった。